昭和十二年六月

會報

IV

地理學談話會

一、談話會報告

昭和十一年二月十一日

朝鮮の火田に就て　西　豊

鬱中の薬草に就て　村井敏衛

國ノ島に就て　村上次明

伯耆大山に就て　水村鶴治

以上卒業論文報告、尚國ノ島は備中瀬ノ戸耐摩の一小島

昭和十二年五月廿日

見島鑑賞　坂川芳太郎

地理學史概説　室賀信夫

伊吹山の薬草に就て　田中彰作

尚見島は萩市沖遠かの日本海の一小島なり

六月廿七日

津山盆地の交通変遷　中江　巌

本邦内地の石炭運輸の概況　山口平四郎
人口地図に就いて　磯田武雄

十一月廿三日　第四回地理學談話會大會

明會の絆
廣島附近の動いた石器時代貝塚に就いて　坪尾明正
フムボルト――アメリカ旅行以前　野間三郎
中部日本の焼畑に就いて（報告提出）　水村鑑治
九州諸港と對馬貿易　山口平四郎
人口地図に就いて（第二報）　磯田武雄
福州と琉球館　米倉二郎
家屋の構造に及ぼす雷の影響　島之夫
古事記に現はれたる地理的名詞　竜本良一
久美浜湾沿岸の古地理　小牧實繁
金島、鍋島及びゴーレス地名の順流　鶴田元駿
江戸間の旧交通路と聚落の変遷　田中秀作

上海港の今昔　中野竹四郎

明會の緯

十二月十九日

地理學論の諸要件　鈴村正路郎

東域の古地と環水說　水村龜治

再びチューネンの孤立國に就て　筋田太郎

南北村氏の演題は卒業論文の一節

昭和十二年一月廿九日

島田平野の人口地理學的研究　中江虔

生駒山脈西斜面に於る水泉の地理學的研究　和田慶二

アメリカのパイロット・チャートに就きて　小野鉄二

南中江、和田両氏は卒業論文報告

二月十日

水郷と江間　伊藤壽

日本・アルプスの高地聚落　水川芳太郎

尚伊藤氏の旅行のフイールドは利根川尻十二島附近

長川氏のは卒業論文報告

第四回地理學談話會大會

十一月廿三日

午前九時開會。定刻既に會場史學科第一教室は學内外の臨席を以て埋められその數凡百六十名、旅行は別項の如く中野・田中・藤田・小牧・鶴見・嶋田の諸先輩も夫々その盛況の一端を傳さる。時間の制限を遂かに超過して再三の警聲に漸く降壇する者も亦一二に止らず遂に定刻を超へて十二時半漸く開會を宣して、會場を隣接史學研究會に明渡すを得た。始めて盛會。石橋先生を始め寺田高松高師教授尊敬の大先輩も臨席に亟され一堂と滑稽の活氣を促さる。談話會後 帝國館正面にて記念撮影。午後一時半より樂友會館にて午餐會を催す。席上石橋先生は故時所感と題して長時間の御講話を賜り、寺田教授を始め會者一同の自己紹介ありたり。

當日大會出席者名簿に記入されたる貴名次の如し。

小牧良樹、藤田元春、中村良之助、藤田武雄、渡辺茂藏、松井武敏、廣瀬準雄、佐伯英二、楊文

書、村井敏衛、山崎修、荻田孝夫、栗賀信夫、島三夫、田中勝作、渠希烈、中麻瑞江、西村嘉男、坂河由則、中江健、伊藤喬、三品彰英、吉田敬市、田中得、鈴木福一、渡辺久雄、辻田右左男、網永鳴二郎、李彰、今井卓三、浅井辰郎、杉村正、岩郎、野間三郎、和田俊二、林盛、内藤宣匡、藤子俊一、谷剛、梅島長谷郎、渡史、米倉二郎――その他一般地理同好者の氏名を略す。尚紀事以外の書目出席者の主なるものを挙ぐれば次の如し、

石橋五郎、平田貞次、勝田生道（以上順序不明、敬称省略並びに書類係員稿紙中の為脱漏多きを惜るも御寛容ありたし）

二　教室行事

○昭和十一年度講義題目

普通講義　小牧助教授　地理学通論（第一部）

中村（新）教授　地理学通論（第二部）

特殊講義　小牧助教授　海岸の地理学的研究

小野講師　地図学

田中講師　植民地理学及び熱帯地理

演習　小牧助教授　内外地誌演習

実習　小牧助教授　地理景実習

講演　小野講師　ドイツ地理書講読

○昭和十一年大學院入學者研究題目

聚落地理學　庄司久孝

水郷都市地理研究　長谷部健史

○卒業生論文題目（昭和十二年三月卒業）

三田生四氏は左の如き題目の下に論文を提出され滞りなく卒業さる。

坂川芳太郎　日本アルプスに於ける高地聚落――特に一〇〇〇米以上

杉村正治郎　エラトステネスの地理學

中江　優　高知平野の地理學的研究――特に人口を中心として

和田俊二　生駒山脈西斜面に於ける水車の地理學的研究

○昭和十二年度講義題目

普通講義（中村教授　地理學通論（第一部）
小牧助教授　地理學通論（第二部））

特殊講義
小牧助教授　地と人
小野講師　地図學
室賀講師　日本地理書解題
森講師　支那歴史地理研究
演習
小牧助教授　地理學の諸問題
実習
小牧助教授　地理學実習
講演
小野講師　ドイツ地理書講読
室賀講師　フランス地理書講読

○新講師

本年は田中講師辞せられ、そのあとを室賀信夫氏が新に講師として特殊講義及佛蘭西語講読を担任されることになつた。

昭和十一年度

二回生歓迎會

五月八日地理學專攻二回生九名の歓迎會を晴嵐荘にて開催す。此回年齢

研究室出發。各自二班に分れ清瀧まで八イキングを行ふ。二班に分れて、心に任せ足に任せて午後五時ますゆに前後して集合ひ、一路の懇歓迎會の席に着く。自己紹介、歓談に時の過ぐるを知らず、たゞ夜の更くるを早きを恨みつゝ午後九時半散會裏に解散。

春季二回生見學旅行

五月廿七日、早朝京都駅發——先生方は朝町見學、學生は大山へ、長瀧木田で集合ひ、富山に向ひ、町見物　自動車にて中ケ瀬へ（一泊）

廿八日、野麦街道を辿り、野麦峠を越へ川浦にて一泊。

廿九日、寄合屋よりバス、電車にて松本に到り、此処にて場學、西島に集合ひ、松本城へ、次いで片倉製絲見學、後、湯川温泉に憩ふ。松本より大町まで電車、次いで自動車にて木崎湖に到り湖畔に宿す。

卅日、木崎水産試驗所見學、汽車、自動車にて糸魚川に着く解散（午後三時頃）

秋季二回生見學旅行

一行小牧助教授、米倉助手と伊藤、並河、西村、佐伯、十月四日徹兵庫出帆（山水丸）翌早朝小豆島着、寒島、川田の土性、地質を見學、大歩危、小歩危は汽車より見學夕方高松着、夜市内見學、畑新投宿、翌日午前中に高松城、琴平、徳島、阿波見學、翌七日朝汽車にて西條川に至りそれより省營バスにて一路松山へ、道後松山市見學さどや旅館投宿、翌八日朝一應解散、小牧先生、西村、並河、佐伯は新居浜を見學、

卒業生懇餞會

昭和十二年二月十日午後談話會あり、終って午後六時より城圓島料理にて卒業生懇餞會開かる、出席者二十六名、田中、藤田、小牧諸先生には御多忙中を御出席、夫々卒業者に處世の方針を賜る、午後九時半盛會を以て散會直に會を開つ、

米倉助手送別會

地理學研究室助手米倉二郎氏は和歌山高等商業學校へ榮轉さる、昭和十二年三月十二日（金）四條河原町下ル桃園亭にてその送別會を催す、此日三十名餘に

上ら出席者あり盛會。田中講師の提案指名により山口氏の吟詠に始まる紅葉百出。眼つろを知らざりしも終に明會。

当日出席者次の如し。

田中秀作、小牧與藏、藤田武雄、渡辺茂藏、辻田右左男、松井武雄、宮岡信夫、安藤鶴一、道端忠、朝永陽二郎、山口平四郎、高田敬市、水村藤治、野間三郎、長谷部護史　及び三回

計二回生。

昭和十二年度

日本地理學會

四月三・四の両日、日本地質學會・日本岩石礦物礦床學會・日本火山學會・地球學團の聯合講演會が工學部に於て開かる。第三部講演に出演の映話會員諸氏及びその演題次の如し。

四月三日

田中秀作　滿蒙聚落の植民地理的意義

工友會三郎　先史聚落に就いて

村松繁樹　「松前遠藤の蝦夷島新鑑補註」について

藪内芳彦　アラビアの旅行者と商人に就て

四月四日

吉田敬市　京都市近郊の條里と地割

仲尾明正　歴史時代に入って起った最後の大きな地形変化の野外資料としての元史地理学的意義

島之矢　大阪市の特殊景観――特に問屋町に就いて

出五口は小牧助教授、織田武雄、吉田敬市三氏の案内にて エ゛スカーションを行はる。御所・二條・丸物・桃山・宇治・山崎・西陣をめぐる慌ただしいコースで當日天候不良なりしも参加者一同の満足裡に散開。

二回生歓迎會

四月二十六日(八月)午後六時より料亭にて地理学専攻二回生五名の歓迎會を開催す。出席者十六名。自己紹介の後、小牧先生の御挨拶あり。此日教室外より御多忙中を藤田、遠辺両氏出席される。午後九時半解散。

三、會員消息

前号及會員名簿（十一年六月）以後會員の異動は次の如くである。轉居は名簿によつて御承知下され度し。

小野　鉄二　廣島高師教授
入江　久夫　靖鉄道清掃會病五郎植民班
松本　博　宮崎縣立延岡中學校長
松下　清雄　山口縣女子師範學校
太田善久雄　靖鉄産業部東京出張所
米倉　二郎　和歌山高商
海老原治三郎　神奈川縣立藤野中學校教諭
別宮　高彦　大阪商大高商部教授
岩尾　常吾　山台陸軍幼年學校教官　當分は廣島にて服務さる
東賀　信夫　京大文學部講師
國頭武一郎　鐘紡淀川工場

朝永陽二郎　同志社女專講師・大谷中學教諭

御子柴幸一　近衛野戰重砲第八聯隊除隊、同志社大學豫科講師及同中學教諭に復さる。

村本建郎　山形縣立山形中學校教諭

野間三郎　京大、文、助手

長谷部德史　大阪府立國芸學校教諭

長川芳太郎　長野縣立飯田高女教諭

中江　健　大阪府立高津夜間中學教諭

和田俊二　京大、文、副手

○尚　室賀新講師及安藤愛一氏は教授の爲當分東京に於て御尊養中。御快癒を祈る

○石橋先生は近來愈々御健勝にして、朝日新聞社編の世界現勢地図（亜洲編行記念）を監修され、更に又地図の作り方と觀方について文部中央教育會より講演を試みられた他、樂餌を去って豪壮に親されてゐるのは會員一同のお喜び

中上る所である。

○堀見正三君は夏期休暇中歸鄉して病を勞って居られましたが　昭和十一年九月（當時同君は三回生）病篤り遂に死去されました。故家にては有志一同樣金して香料を供へました。

四、雜報

○東京帝國大學文學部地理學研究報告　第一冊

右は文學部の補助を得て本年四月第一冊を出す運びとなり、論叢と相並んで水數型の業績を世に問かことゝなりました。補助金を仰ぐ關係上、文學部從來通以外の論稿を掲載し得ぬのは誠に遺憾でありますが、將來一層好都合な形式に發展さすべく考慮してをります。成るは一に諸話會員諸氏の御援助に俟たねばなりませんから御購入及御勸誘をお願ひ申してをきます。

○論叢第九輯豫告

論叢も既に編を重ねること八、今第九輯出版の準備中であります。内容は昭

和十一年度年末端氏の論文を以て為たされる事柄であります。相分量に過ぎぬ内容と論評である故に従来その費行が極めて少く、出版者も難色を示してをりますので、論分体裁を重めこゝ両度ばかり様子を見ることになつてをります。會員端氏の御援助によつて啓発機関を育てゝ行きたいと存じてをります。

尚論叢について御意見御希望をお洩らし頂へれば、及ぶ限り改善もはかりたいと存じてをります。

○談話會よりのお願ひ

教室にては支障なき限り毎月一回談話會を催ほしてをりますが、後輩の指導鍛達の為先輩各位の御出席時に御出席を切にお願申します。その御連絡は葉書を以て御出席の諾否をお問せねばなりますまいが、通信費の僅へ少き故勝手ながら、こゝにお願ひするのみとします。題目及び都合よき時日をお洩し下されればそれによつて談話會のプランを編成致したいと存じます。時にお會みをきを願ひます。

尚住所その他御変動の節はお手数ながら研究室あて御通知を賜りたく存じます。

（水曜部会報は種々の手落ちの為延めて遺憾なものとなりましたが、爾後手落ちなきを期してをります。幸に御感想御希望もお聴し願へれば論説に存じます。）

京都市丸太町通鹿野神社横入
印刷所　甲文堂
電話上五一〇二番